
君は風と共に

まゆか

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

君は風と共に

【Nコード】

N0765A

【作者名】

まゆか

【あらすじ】

屋上での美里の告白をきっかけに付き合い始めた達樹。だがある日突然、美里がエイズ（HIV）になったことを知らされる。たちちゃん、今までありがとうね・・・とてつもなく悲しい恋の物語。

1・在り来たりな告白

陽射しが一番高い所にさしかかろうとしている正午前。

場所は富岡中学3年1組、只今自習中。

「放課後屋上？」

額にかかる黒髪の下で、漆黒の瞳が不思議そうに瞬いた。彼の名は、佐藤達樹。

ごく普通の中学生。もう少しで高校生である。

参考書から視線を上げたその先で、照れくさそうにうなずいているのは、草原美里だ。

「それじゃあ後でねっ」

美里はその場を走り去って行った。

達樹と美里の関係はというと、ただクラスが一緒なだけ。

だが、屋上に呼び出されるとなれば、いろいろ連想できるものがある。

そこでクラスの男子達に、

「ヒューヒュー」

と、冷やかされる。だが、達樹と美里はあまり気にしてはいなかった。

この2人には天然が入っており、皆の言う事は全て単なる冗談にしか聞こえないからだ。

そして、屋上に着いたその瞬間、

「好きです！付き合ってください！」

美里の大きな声が屋上中を駆け巡った。

達樹は驚きを隠せなかったが、少し深呼吸をし、美里を見つめた。ぱつちりとした瞳。薄桃色の唇。肩まで伸びたブラックの髪。

笑った顔はさぞかし可愛いと思わせる。

だが今、彼女の頬は強張って震えていた。泣くまいと我慢はしているが、

瞳はもう潤みきつている。そんな美里に達樹は魅せられ、
「俺も好きだ」

達樹が言った途端、美里の瞳からは大粒の涙が流れ出し、
2人は抱き合った。

「ねえ、達樹くん」

「ん、何だ？」

抱き合ったまま、美里が言った。

「達樹って呼びにくいから、たっちゃんって呼んでもいいかな？」

「ああ、いいとも」

「ありがとう。たっちゃん」

そうして2人の付き合いは始まった。

2・天然と優しさ

次の日、美里は学校へは来なかった。理由は風邪らしい。

達樹が電話で話を聞くと、あまりにも嬉しくて風邪をひいたみたいだが。

「あれー、達樹の彼女が休んでら」

教室にいる誰かが言った。どうやら、2人のことはもうクラス中に知れ渡っているらしい。

「あーそうだな。明日は来るといいなー」

達樹は天然のため、ふざけながら言い返した。

「うっほー！噂本当なんだな。まじかよ？」

・・・試された。それでも達樹は試されたことに気付いていない。そのまま達樹と美里が付き合っていることは、クラス中ではおさまらず、

学年中、学校中へと伝わっていった。

3日後、美里の風邪が治り、学校へ来た頃にはもう遅かった。

黒板には愛愛傘が書かれ、席はいつの間にか隣同士になっていた。

「た、たっちゃん。これ・・・」

「ま、いいじゃん。隣になれたし、一石二鳥だって」

達樹は相変わらずの呆けで、美里はあんぐりとしていたが、本当は嬉しいようだ。

だがある日のこと、

「佐藤！一体どういうことなんだ!？」

達樹は問題を起こした。万引きしていた生徒を注意していたところ、自分が

万引き犯だと疑われたからだ。

達樹は自分の身の潔白を証明せず、その生徒をかばった。

「ごめんなさい。もうこんなことはしません」

このことは、学校中の問題となった。

君は風と共に

一方美里は、友達の由真にこんなことを言っていた。

「たっちゃんはそのなことしないよ。私は信じてるもんっ」
美里は達樹のことを信じていた。

その日から、美里と達樹の仲は、強い絆で結ばれていった。
だが、そんな幸せな日々は、そう長くは続かなかった。

3・二度目の告白

最近、美里の調子が悪いのだ。授業中、だるそうにしたり、風邪でよく休んだりしている。

達樹がどうしたのかと聞いても、黙ったまま首を横に振るう。

そして、美里はついに病院へ。達樹は見舞いへ向かった。

「ねえ、たっちゃん」

病室で2人きりになった時、美里が口を開いた。

「何だ、美里」

「あのね、実は私、エイズなの・・・」

「エイズ？どういふことだよ・・・」

美里はエイズだった。といつても、まだ関連症候群だが。

「私、小さい頃ね、交通事故に遭って。輸血した時、感染しちゃったみたいなの」

ひどく落ち込んだ声で、美里はエイズがどういうものかなど説明した。

「でもな美里。それで落ち込むなよ。病気にかかったって、美里は美里。俺の大好きな美里だ」

「たっちゃん、私も、いつまでもたっちゃんのこと好きだよ！」

2人は抱き合った。だが、達樹は一度、手を離してしまった。

達樹が病室を出た後、美里は大粒の涙を流した。

達樹はあれから、図書館に通い始めた。

エイズを詳しく調べて、美里がどれだけ苦しんでいるか、ちゃんと理解したかったからだ。

エイズ、と名のつく本があれば探り、達樹は、見るごとに表情が険しくなっていた。

エイズウイルス（HIV）に感染すると、免疫が破壊され、体内に侵入しても、

あまり影響の無いはずの細菌、かびなどに負けてしまい、

いろいろな病気を引き起こしてしまつう。

感染症をくり返していくうちに、重症になつていき死に至る。

エイズによる死、といつても、エイズウイルス自体が、人を殺すわけではないのだ

「美里はこんな目に・・・」

達樹にとつてエイズとは、遠い世界のことだと思つていた。

かなり誤解していたことに、すごく驚いた。

今までの美里は、無症候性キャリア（AC）、要するに無症状で、今はエイズ関連症候群（ARC）、疲労感などで、少し症状がある。

だから今の美里はすごく大事な時期。この時達樹は、美里と共に苦難を乗り越えようと、誓つていた。

4・悲しきやり取り

達樹の苦難。それは、美里が苦しんでいること。だから、美里の病気が早く治るように願う。

そしてある日、美里の見舞いに来ていた達樹は、病室のドア越しから、悲しい光景を目にした。

美里が、クラスの女子が持ってきた、花束と手紙を叩き落していた。

「なによっみんなしてっ！わたしたちだっつらいのよっなんて顔して！！」

家に帰ればテレビ見て笑って、あー勉強しなきゃとかさ・・・みんなけつきよくは

自分の生活があるんだよねっ。美里以外に不幸な人間はいないだから自分は幸せだっつて、

わたしの姿見てホッとするためのくるの！？でてけー！みんな帰って！！！！」

もはや美里は冷静では無かった。やり場のない怒り、不安、悲しみ。

達樹はどうしていいか分からなく、呆然と立っただけだった。実はこの日、美里の身体からガンが発見され、ついにエイズを発症した。

そのせいで女子に当たっていたんだろう。

だから、これからが美里の、本当の戦いなのだ。
次の日、達樹は病室で、美里を抱いた。力を込めて、ぎゅっと。

「痛いっ、痛いよたちちゃん！」

「嫌だ、離したくない」

達樹は更に力を込めた。

「だめだよ、たちちゃん！病気がうつっちゃうよ・・・」

「俺は感染してもいい。美里と一緒にいられるなら、それでいいか

ら

達樹は腕を振りほどいた。

「ねえ、それなら私と心中してくれるの？」

「え……？」

達樹がそう言つと、美里は手首の点滴を無理矢理外し、針を達樹への向けた。

「恋人なら一緒に死んでくれるんだよね？感染してもいいんだよね？」

美里の頭の中はすでにパニック状態。さっきと人が変わったみたいだ。

そして、美里の持つ針が達樹の方へと向く。

だが、達樹は微妙だにせず、前を見据えていた。

針が達樹の方へと刺さる。しかし、針は達樹では無く、脇の壁へと刺さった。

5・笑顔は永久に

「なんでそらすんだ」

「なんで避けないの？」

「言っただろう。感染してもいいって」

達樹は今までと変わった、冷静な口調で言った。

「やっぱり、たっちゃんには死んでほしくない。死んでほしくないよ！」

美里は大声で泣き出した。それから、美里は針を持ち直し、こう言った。

「たっちゃん、私の病気、血液全部取り換えても治らないのよ！今まで努力してきた。

でも、病気は私の身体から逃げてくれない。だから生まれ変わりたいって思ったの！

しかも私、たっちゃんがいなくて病気にならないのと、たっちゃんがいって病気になると、

何回か迷ったんだよ！！自分が一番だったの。それでも私のこと好き？もう、もう嫌よ！！！」

美里は外したままの針を、今度は自分の方へと向けた。

「たっちゃん、今までありがとうね。」

これが、美里の最後の言葉だった。

「美里！」

達樹が声をかけても、手遅れだった。美里は自分の心臓を刺し、事切れていた。

「美里、起きろって、目を覚ましてくれよ！うあああ！！！」

達樹の必死の叫びはもう届かない。最後に、こんな手紙が残されていた。

「たっちゃんへ」

この手紙をたっちゃんが読むころには、私はもういないかもしれない。

でもね、どうしても伝えておきたかったことがあったの。

それは、死んでも死んでもあなたを愛し続ける、

やっぱり、たっちゃんのいない人生なんて考えられない。

だからたっちゃんからも、ずっと愛されたい・・・

私の愛する人だから、私の分まで生きてください・・・

美里より」

あの日のこと、手紙のことを、達樹は一生忘れない。

最愛の恋人が目の前でいなくなったから。あたかも風のようにいなくなっただから。

達樹が空を見上げると、何だか雲さえも笑っているように見えた。

美里のように・・・

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0765a/>

君は風と共に

2008年11月7日06時46分発行